

東インド会社論争とロバートソン 『インド史論』 —哲学的歴史と古事文献学—

角 田 俊 男

序論—啓蒙の歴史学と帝国

本稿はウィリアム・ロバートソン (William Robertson) の『古代人がもったインドの知識および喜望峰経由航路の発見以前のその国との交易の進歩に関する歴史的な論考、インド人の政治、法と司法手続き、技芸、科学、宗教制度の所見を含む付録 *An Historical Disquisition concerning the Knowledge Which the Ancients Had of India; and the Progress of Trade with That Country Prior to the Discovery of the Passage to It by the Cape of Good Hope. With an Appendix, Containing Observations on the Civil Policy—the Laws and Judicial Proceedings—the Arts—the Sciences—and Religious Institutions, of the Indians*』(第2版1794年、以下『インド史論』と略記)を、その直接の政治史的文脈である1790年代の東インド会社の論争に置いて実践的な意図を論究するとともに、より長期の歴史学史における啓蒙の哲学的歴史と古事学・文献学の展開の中に位置づけようと試みる¹。同書の研究は、カーナルの論考が参照すべき出発点となる²。そこから、15世紀末のインド航路開拓までのヨーロッパの東地中海・中東地域を介したインドとの通商史本論よりも、付録の「インドの人々の精神・習俗・制度」の方が先に書かれ、より関心が持たれていたらしいことが判る。カーナルはインドを他者化しな

¹ 本稿は科研費基礎研究 (C) 「植民地期インドをめぐる思想の諸相：ヨーロッパの視点とインドの視点の交差」の共同研究の成果の一部である。

² Geoffrey Carnall, "Robertson and Contemporary Images of India," in Stewart J. Brown ed., *William Robertson and the Expansion of Empire*, Cambridge University Press, 1997, pp. 211-214, 217-226, 230.

いロバートソンのインド論を同時代のインドの否定的なイメージと的確に対比し、寛容な姿勢を強調した。植民地化される以前の、インドの過去の社会文化に古来の持続性を評価するロバートソンは、インド人の自治能力を否定し専制的な帝国支配を正当化する通説からは距離があったとされるが、彼のインド文明の理解はどのような帝国論につながるか、具体的に詳しく論じる必要があるだろう。さらに、カーナルは歴史学としてのロバートソンのインド論という観点からは論究していないことが指摘できる。イスラーム征服者の扱いという個別論点の解釈において、レーナル『両インド史』との違いを比較しているが、さらに歴史学の方法論に広げて、この同時代の偉大な史書と比較する必要があるだろう。

ブリテン人によるインド論に関して、先行研究は19世紀に集中し、手薄だった18世紀のインド論を本格的に綿密に探究したパターンソンは、ロバートソンの『インド史論』を18世紀の英仏でインドの洗練された古代宗教哲学への関心を文明史の必要な要素とした啓蒙思想の流れに位置づける³。しかし、普遍的な哲学的歴史の観点からの解釈では、ギリシアやローマの古代人のインドについての知識やその諸史料の批判的な比較検証が大きな部分を占めるこの本の特徴は落ちてしまう。遠く離れた異邦であるインドの雑多な事実についての知識の展開の歴史にその史料の論証方法において本研究では着目したい。

『インド史論』の直接の文脈は1790年代の東インド会社の問題（ヘイスティングズ総督弾劾）であった。この著作の実践的な目的について、巻末でロバートソンは明言している。インドの先進的な文明を論証することで、「ヨーロッパ人のその国民への行為に影響を与える」ことが彼の意図だった。人々は自身の社会の進歩の段階を「完成の規準」とみなして、類似した状態にない異民族に軽蔑と嫌悪を示す傾向があるという公平な視点から、ロバートソンはヨーロッパ中心主義を反省するのである。ヨーロッパ人は世界各地での支配から、アフリカとアメリカ

³ Jessica Patterson, *Religion, Enlightenment and Empire: British Interpretations of Hinduism in the Eighteenth Century*, Cambridge University Press, 2022. pp.47-48.

では顕著な差異から自身の優越を自負し、奴隷化や根絶化する権限があると考えた。インドでも、状況を他者化する説明(宗教の教義や儀式の法外さを含む)によってインド人を「劣った人種と常にみなし扱った」。この偏見に対してロバートソンはインド人が「ヨーロッパが文明化への跳躍を始めるよりも遙か以前から高度な改善の度合いに到達していた祖先から発しているとみることに慣れさせる」ことで、「インド人への適正な意見」と「人間としての彼らの自然権への正当な考慮」を植えつけると考えた(331-333)⁴。「彼らの性格をより尊敬されるものにし、彼らの状態をより幸福にすることに貢献できる」希望を抱ければ、彼の歴史家としての生涯の最後の仕事も無駄ではなかったという満足で閉じられると最後を締めくくっている(334)⁵。東インド会社の権力乱用と腐敗が指弾されたとき、インド人の性格の実情は、特殊な無気力、墮落、野蛮として、そこから専制の必要を説き、西洋化という改革の目的で正当化するのが、この時期からのブリテン帝国の議論の一つの中心だった。『インド史論』はこれに意義を申し立てたことになる。

この弾劾の論争で引用されたフランスのレーナル編集の『両インド史』は、哲学的歴史を軸に、それと東西インドの地理・経済・宗教・習俗等の情報収集を組み合わせた。そのインド論の中心は啓蒙の宗教(バラモンの閉鎖性)批判と言え、

⁴ 『インド史論』からの引用は、本文中に括弧で参照した次の版(著者自身による最後の校訂版)のページ数のみを記す。William Robertson, *An Historical Disquisition concerning the Knowledge Which the Ancients Had of India; and the Progress of Trade with That Country Prior to the Discovery of the Passage to It by the Cape of Good Hope. With an Appendix, concerning Observations on the Civil Policy—the Laws and Judicial Proceedings—the Arts—the Sciences—and Religious Institutions, of the Indians*, 2nd ed., London, 1794.

⁵ インドへの無知と偏見に挑戦するロバートソンの意図は、弾劾を主導したパークの意図と重なる。パークはアジアの専制論の論駁として、古来の国制のもと権利を継受してきた「名誉と卓説性」をインドの人々に回復させ、対等な権利主体として彼らへの共感を喚起しようとした(Edmund Burke, “Speech in Reply,” 1794, in *The Writings and Speeches*, vol. VII, *India: The Hastings Trial 1780-1794*, ed. P. J. Marshall, Oxford University Press, 2008, pp.264,279)。1780年代から世の耳目を集めた東インド会社問題について、次のようなパークの理解と対策に、ロバートソンの『インド史論』の問題意識は通じることが本稿の以下の行論で示される。パークによれば、会社による支配以前にインドで専制を認めなかった法の支配の伝統と通商の相互利益の原理から外れた会社の失政と乱用に原因があり、独占的な規制や税の収奪によるインドからの富の流出が深刻な問題で、彼は通商関係を軸にした帝国秩序の回復を構想した(荻谷千尋「インド論」、中澤信彦・桑島秀樹編『パーク読本』、昭和堂、2017年、75-77頁を参照)。

バラモンの閉鎖性と特権が指弾され、さらに、西欧諸国の東インド会社の帝国支配に抵抗する自立を先住民に訴える哲学的雄弁がデイドロによって発揮された。インドとヨーロッパ諸国の通商・植民の歴史という共通の主題からも、影響力の大きかった同書との比較に触れておこう。ロバートソンはオスマン・トルコの軍事専制からヨーロッパの自由をポルトガルのインド進出が救ったという説明を『両インド史』に負っているとして、その「巧妙さ」「雄弁」を讃え、「さらに十分な調査に値する」と評している(221)⁶。同書は「序文」で、古代から15世紀のインド航路開拓による「革命」までの概観で始まるが、ロバートソンの通史は、アレクサンドリアの支配国の変遷のように、インド交易路とインドについての知識に焦点を集中させた文章であるのに対して、『両インド史』「序文」は貿易業の隆盛がヨーロッパ諸国の間を変遷していったことを、古代から非常に多数の国々にわたって順に急ぎ通観していく散漫な印象を与えるかもしれない⁷。

ロバートソンは、東インド会社を巡る論争の文脈で、法の支配を享受する自然権の主体としてインド人の再評価のために、その歴史=古代文明、特に古代の精神文化をギリシア・ローマに先行する世界の普遍的古典と位置づけるのに、サンスクリット文献学や古代建築物の解釈などの古事学の成果を参照した。ヒンドゥー社会をブリテン帝国の枠内での対等な共存のために寛容な市民社会に包摂する方向と言えるだろう。

同時代の直接的な文脈である東インド会社の失敗をめぐる論争の関連で読むことが本稿の第一の主題であるが、第二に、歴史学史からこの著作の全体構造の特徴を分析する必要がある。『インド史論』の本論はインドとヨーロッパの古代の交

⁶ ロバートソンのギボンへの評価は「正確さ」「的確さ」「勤勉と識別力」であることからすると(382)、歴史家としての『両インド史』の著者への評価には微妙なニュアンスもあるようだ。古典古代から受容された西欧近代史学の方法については、モミツリヤノ「Gibbonが歴史学の方法発展に寄与した点」『歴史学を歴史学する』木庭顕編訳、みすず書房、2021年、138-163頁を参照。

⁷ Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, Anthony Strugnell, Centre international d'étude du XVIIIe siècle, Ferney-Voltaire, 2010, 123-38 / ギョーム＝トマ・レーナル『両インド史』大津真作訳、法政大学出版局、2009年、東インド篇、上巻、7-28頁。

東インド会社論争とロバートソン『インド史論』—哲学的歴史と古事文献学— 角田 俊男

易についての通史で、国際的な交流の文明史のマクロナラティブを提示する。エジプト（アレクサンドリア）がインド交易の中継点で、そのローマによる征服とイスラーム勢力による征服によって時代を区分して節が設定される。ここは通商の進歩に関する哲学的歴史に依拠した大きな叙述である。同時に、巻末にまとめた注の形式で、通商の叙述（historical narrative）を補完するように、細かな事実や状況について古代の史料を科学的、批判的に検討確証する（scientific and critical discussions）、雑学的あるいは学際的な文献学・古事学や学識（erudition）に相応する詳細を扱うページが巻末にある（vi）。さらに、第三の構成部分は、イギリス東インド会社が専制の正当化の論拠として用いたインドの野蛮性を反駁しインド古代文明を評価するために、インド社会の政治・法・学芸・宗教など多様な習俗や制度を体系的に記述する地誌的な付録である⁸。本論では以上の三つの部分の関係を考察する。ロバートソンは叙述にすべてをまとめることはしないで、三者を区分し分離している。この三つの部分の関係を考えることが『インド史論』の全体的理解に重要である。民族誌的記述を、「史書の本性によく適合しない議論」として、最後の付録まで取っておくのは、歴史的な変化と共時的な描写とは合致しないということなのだろう。交易史の流れを、途中で史料批判やインドの古事学への脱線による遷延を挟むことなく、最初にまとめたことから、軍事政治の歴史叙述の支配に経済史を置き換えることで、同時代のイギリス東インド会社が国家主権を篡奪したインド支配への批判という実践の意味が読み取れるとともに、通商の哲学的歴史と古事学の個別的事実の史料検証の衝突を避けて、分離させたものと解釈できるだろう。最終的な本の構成で、哲学的歴史が本論となったことでは、そこに彼が公衆に伝えたかった中心があり、巻末に置かれた古事学的な史料批判やインド地誌・民族誌の蘊蓄は、抑制的で従属的な位置づけにもみえる。

他方で、ロバートソンが古代のヨーロッパ人と理解するギリシア・ローマ人の残

⁸ ジェームズ・ミルによると、インドの情報を扱う多様な書籍には、旅行記、史書、文献学や古事学の書、原典の翻訳、宗教書、法・科学・習俗・技芸の書があった（James Mill, *The History of British India*, 5th ed., notes and continuation by Horace Hayman Wilson, vol.1, London, 1858, p.xvi）。

した記述史料の論証を脚注ではなく、まとめて独立させたことから、古代人のインドに関する知識の批判的検証を、独立した意味のある部分として、重視していたとも考えられる。注は古代人のインドについての学識の限界を強調する方向で、その後の進歩した地理や科学的知見との照合から批判している。遠隔で接触も稀な旅行者のもたらす不正確な事実、驚異的な作り話を鵜呑みにする軽信性が、詳細な個々の史料について批判される。この「注と例証 Notes and Illustrations」の詳細部分を、この論文では、古代通商の通史的叙述とともに、時代順に取り上げる。

古代の知識への軽信性批判は、しかし、外からの古代インドの知識を否定する懐疑主義に至るのではない、古代インドについてロバートソンが正確な事実を論証する方法はどのようなものだったか、付録の古事学が例示する。堅固な真実として依拠するのはヒンドゥー教の古典テキストであり、その解説にインド文明の古来からの不変性という想定を加味して、インドの文化を称揚する。歴史研究として、商業文明史の歴史的な社会進歩を説く基本的な啓蒙思想は、インド古代文明の悠久性という古事学の共時的な記述と整合するのだろうか。また、ロバートソンが史料として論及する古代建築は、ヒンドゥー教徒民衆の偶像崇拜の迷信・神話の实在性の論拠となるが、原典テキストから唯一神を追究するというヒンドゥー教解釈の主論点への反例とならないだろうか。ヒンドゥー教の原テキストにインドの宗教を還元することは、哲学に歴史や古事学を従属させることだったのだろうか。科学的事実の実証や古代交易の接触の限定性から、そして原初テキストの合理的な厳密性から、批判的な検証を崩さないロバートソンのインド史は、インドの習俗や制度の多様性を、遠い異邦の見慣れない奇妙な寓話や迷信として排除する偏狭なヨーロッパ中心主義から自由ではなかったのだろうか。交易史のモノの交流から論証した古代インドの産業の優位と繁栄を認め、ヨーロッパの古典古代以上に古代インドのサンスクリット語の学芸を評価することからは、インドを他者化し排除する偏狭さを乗り越える広い想像力も彼の批判には働いていたように思われる。こうした彼の古代インド観の多面性と限界を『インド史論』の史料批判を担う古事文献学の方法から考えよう。

東インド会社の問題に関する第一の政治史的な直近のコンテキストと第二の史

東インド会社論争とロバートソン『インド史論』—哲学的歴史と古事文献学— 角田 俊男

学史の思想史的コンテクストとはつながっている。インドの人々の植民地化、隷属の問題を解決するような彼らに自由と権利を正当に認めるインド古代史の理解の方法を探究するために、ロバートソンは哲学的歴史と古事文献学の方法をどのように組み合わせるか、実際に史料を批判的に検討し利用しながら、模索したのであろう。

第1章 通商の歴史叙述とその史料の科学的批判的論証

1. アレクサンダーのインド征服と通商

ヨーロッパとインドとの古代の関係は、中東地域を媒介とした間接的な通商が中心で、侵略はアレクサンダーの事跡⁹のみの例外に過ぎないと、政治軍事から経済への主題の転換を意識させる叙述が展開される。アレクサンダー以前のインド侵略の史実の批判の例として、注1でのエジプトのセソストリス (Sesostris) 王の侵略の反証をみよう。第一にエジプト人が航海を忌避した習俗は宗教に由来し、専制権力でも改造できないと論証する¹⁰。第二は史書の分析で、エジプト史についての「最も根気強い精励」とヘロドトスの権威を認め、彼がこの征服に触れていないことから、彼の時代とディオドロス・シケロス (Diodorus Siculus) の時代の間に、発明された話と推定し、シクルス自身がエジプトの僧侶は真理よりも祖国の名誉に関心があると批判していることを挙げる。第三は内容について信憑性を欠く状況を含む点で、セソストリスの父が息子と同日生まれの男児を皆集め養育し彼の後の企ての「道具」としたが、その人数は40歳で1700人であったという。「政治算術」原理から、ロバートソンはこの人数には毎日1万人の出産が必要となり、エジプトの人口は600万を超えるというあり得ない規模に帰着すると批判する。船舶の壮大さも「驚異的な細部」が「蓋然性の範囲を超える」

⁹ アレクサンダーのインド征服の近代における表象については、Phiroze Vasunia, *The Classics and Colonial India*, Oxford University Press, 2013, Part I. Alexander in India を参照。

¹⁰ 同様に、注目すべきことに、背景にある種々の情況との調和から行為の史実性を検証する方法は、対ギリシア海戦でペルシア王の子息やサトラップが軍船を指揮したとするヘロドトスの叙述に適用され、宗教による海洋進出への強力な禁忌から、「このように行動する気にさせたどのような動機や権威があったのか、私には説明できない」と、注10、352で批評している。

と批判し、ストラボンの「健全な知性」はこの遠征を否定したと援用する(335-338)。

アレクサンダー以前のインド征服では、ペルシアのダレイオス大王がインダス川流域にスキュラクス(Scylax)を探索に派遣し、征服したことが、ヘロドトスに描かれるが(巻4, 44)、ロバートソンは、ヘロドトスを尊重しながらこの史実に触れなかった複数のギリシア史家(Nearchus, Ptolemy, Aristobulus, Arrian)から、スキュラクスの報告が信用されていなかったことを論証し(注7, 345)、本文でも彼の旅行の記述は虚偽の脚色に満ち、ギリシア人が「蛮族」とみなした遠隔の国々の人々には注意が払われなかったので、インドの知識は普及しなかったと結論している(14)。

ヨーロッパへインドの実際の見聞による知識を伝えた最初はアレクサンダーの征服であると、ロバートソンはその画期性を位置づけており、実際に2千年前にインドの気候、住民の身体的特徴や生活、カースト制度とサティまで、現在と同じ習俗・制度が記録されたと認める(24-26)。彼らがインダス川河口やインド洋の干満の膨大さに驚異した記録については、ロバートソンは、ヘロドトスが紅海[=現代のインド洋]の干満に言及しているにも関わらず、ギリシア人の読者は不注意で、この自然の地理的知識が共有されていなかったのであると、彼らの驚愕が事実であったと説明する(注7, 347)。自然現象については、権威ある史家による正確な記述であるかどうか論証可能であるが、真実の記述であっても、印刷術以前の古代の知識の広がりには大きな限定があったことが読み取れる。

ロバートソンは、アレクサンダーを偉大な征服者として賛美するよりも、インドとの海洋交易の開拓、都市の建設¹¹と同盟の締結など(33)、征服は東西交易の増進をあくまでも目的とする手段であり、ギリシアとペルシア・インドの民族の感情での対等な和合を目指した点を評価する¹²。この点は特に留意すべきで、

¹¹ 注11, 353で、その数70を下らないのは多すぎるという懷疑に対しては、ロバートソンは、都市の建設が征服地支配の権威を維持する方法であったという当時の事情から説明している。

¹² 「両大陸の住民が感情の類似に徐々に成型されていき、相互の情愛で相互に惹かれ合うようになるだろう」とDiod. Sicul. lib.18. c.4を引用している(注8, 349)。後述するように、この点で次の世代のジェームズ・ミルとの相違は深い。

そこに18世紀後半に商事会社による国家主権の乱用が問題となった東インド会社の帝国統治に対する彼の批判的な意図が示唆される。批判的な史学史としては、彼はペルシアやアラブの「東洋史家」によるアレクサンダー時代の歴史について「ほとんど注意に値しない、多くの非現実の信用できない情況」を指摘している。他方で、「インドスタンの史家」がより正確に征服を説明したかは、サンスクリット語で書かれた史書が翻訳されるまで待つと評価を保留する(349)。さらに、ビジョール(Bijore)にアレクサンダー征服時のヨーロッパ人の子孫という伝承を保持する部族がいることを、アブル・ファズル(Abul Fazal)とスージャ・ライ(Soojah Rae)の「評判のよい東の史家」が報告していることに触れ、この系図は虚偽と否定するが、アレクサンダーが他のギリシア人に征服地を委ねたというような根拠はあったかもしれないと認めている(350)。

アレクサンダーの後継諸国のうちセレウコス朝シリアがインドに遠征し、マウリヤ朝と交戦するが、ロバートソンの史観では、東西関係の基調は平和な交易で、エジプトのプトレマイオス朝がインドとの海洋貿易を展開し、アレクサンドリアは空前の繁栄を続ける¹³。この平和な交易の叙述には、ロバートソンの時代の東インド会社の戦争の権利を行使する好戦的なインド政策への批判を読み取れるだろう。紀元前126年のバクトリアのギリシア系王国の滅亡以来、ヨーロッパ勢力によるインドの征服は15世紀のポルトガルまで絶えてなかったということをロバートソンは強調する(43-44)。

彼によれば、モノの交流は直接の接触による見聞を伴わず、インドについての知識は断片的にとどまった。彼のこうした抑制的な姿勢は古代史書の批判による。セレウコス朝の進軍をインド内陸奥深くまで、ガンジス川河口までとするプルタークやプリニウスの史書を彼は批判し、そうした長期の行軍はありそうもなく、ガンジス川河口まで到達していれば、古代人のその地域の知識はもっと正確だっただろうと指摘している(注12, 355)。王がマウリヤ朝に送った外交使節として、

¹³ インド西部との間接的な通商関係からその情報知識も集まったアレクサンドリアはヘレニズム期以降ギリシア古事学・文献学の中心地でもあった。

メガステネース (Megasthenes) は首都に数年間滞在し、ガンジス川を見た最初のヨーロッパ人と認め、インドの内陸の知識を古代人は彼に負うていると評価している¹⁴。しかし、驚異への好奇心から、身体を隠す巨大な耳を持った人々、一つ目、口や鼻のない、長い脚の、かかとが前についている人々、小人、楔形の頭部をもった人々、金を掘り出す狐の大きさの蟻など多くの虚偽を真実に混入したと批判する (38-40)。ただし、ロバートソンは散逸した彼の滞在記を伝えるストラボンについて信憑性を全否定するのではなく、検証する方法を明言している。すなわち、第一が「内在的な明証性」であり、上記の驚異の例はこれを欠くので否定される。第二に「他の古代の著者の証言による確証」で、第三が「近代の経験との一致」である (40-41)。

2. ローマ帝国とインド交易

第二節では、ローマ帝国のインド交易を背景に、インド地理の知識の進歩が停滞していた状況が叙述される。ローマ文明の洗練された奢侈の趣味を原動力に成長したインド交易を軸にローマ史を俯瞰するロバートソンは、インド交易の中心地エジプト (アレクサンドリア) とシリア (パルミラ) の征服を交易史の観点で整理するが、パルミラの繁栄と権勢がインド交易に基づいていたにもかかわらず、古代ローマ史学には経済史を等閑視する傾向があったことを批判する。史料となる古代史書の政治・軍事史への偏りは次のように指摘されている。

過去の時代の歴史に教育的なものを求めるとき、地球を荒廃させた征服者の偉業や諸民族を不幸にした僭主の気まぐれが詳細なしばしば胸の悪くなるほどの正確さで記録される一方で、有用な技術の発見や通商の最も有益な部門の進歩は黙って見過ごされるか、忘却に沈むままに放置されるのを見るのは、残酷な屈辱だ。(59)

¹⁴ ロバートソンによれば (注 18, 361)、エジプトの貿易商のガンジス川上流部への行き来は通常なかったため、内陸の事情はメガステネースに依拠し続けた。彼は次のストラボンの保留に注意を促している。「それは非常に遠い国で、訪れた人はほとんどなく、その人たちの多くはわずかな部分しか見ていないで、伝聞から、あるいは、せいぜい行軍や旅行の途中で通りがかったときに急ぎ気づいたことから、物事を語ったのだ Strabo. lib.xv. p.1005」

権力を巡る権謀術数に傾斜した古典古代の歴史叙述に対する批判が、通商の歴史を中心にもってきた本書の革新の大きな特徴である。こうしたタキトスの史書への見直しは、東インド会社の政略征服に踏み込んだ主権団体への変容に対する警告と読めたのではないだろうか。古代の政治制度で重要でなかった通商について古代史家は詳述することは決してなかったので、「短い示唆、断片的な事実、偶然の観察」を史料とする他ないと(63)、ロバートソンは自身の史論の史料上の課題を認識していた。関連する注21によれば、さらにこの古代史学の偏向はプラトン、アリストテレス哲学において、国家が商業を排斥したことに由来していた(366-367)。

この史料の限界は、近世には国家財政に経済を不可欠とする認識が広まり、広く経済の諸事象の詳細な事実を体系的にまとめたスミスの『国富論』が例証するように、克服されていったのであるが、古代史学の政治史叙述においては、通商は周辺的な知識である点で、遠隔の異邦人の習俗・制度の地誌と同じような位置づけであっただろう。インドについての知識も通商の知識もともに偏った僅かな史料から慎重に探究していくことになる。

通常のローマ帝国史の征服戦争、皇帝と軍隊の変質、蛮族の侵入など「衰亡 decline and fall」の主題の欠如が特徴と言えるロバートソンによる古代ローマのインド通商史は、貿易商ヒッパロス(Hippalus)が季節風を利用したインド西岸への遠洋航路を開拓した事実から始め(60)¹⁵、交易の性質、商品を構成した奢侈品の細目として、(1) 香辛料と香料、(2) 宝石、特に真珠、(3) 絹について概説する。品目についての史料の検証は、『エリュトラ海案内記 *The Circumnavigation of the Erythraean Sea*』をローマ法の関税支払に関する法規で傍証するという方法による(71, 73)。さらにインドの港での輸出入の積み荷の内容が論及される。続いて、インド交易の古代と現代の比較によれば、「インドの先住民の社会と習俗の状態」は現代のそれと類似していて、同様の必要と需要が存続し、職人の進歩した技術が外国製品を不要にし、ヨーロッパ側は金銀で奢侈品を購入する基本的な

¹⁵ ただし、その後に書かれた『エリュトラ海案内記』(70年頃)も海岸沿いの従来の航路を描くので、多くの交易船がこれを持っていたと注記している(注20, 366)。

パターンが持続する。ロバートソンはさらに時代の変化を二点指摘する。第一はインドからの綿製品の輸入は現在と比較できるものは古代にはなかった。第二はブリテンへの製造業の原料（綿、絹、硝石など）の輸入は、古代は僅かだったが、現在は相当増加している（74-75）。

ただし、交易よりもインドの知識がより中心的な主題で、ロバートソンは、この後、多くのページを割いて、ローマ帝国はインド東岸やそれ以东についての知識は乏しかったことを古代の種々の史料で論証していく。『エリュトラ海案内記』からは、アラビアからの交易船は東岸のコロマンデル海岸までは航行せず、西岸のマラバル海岸で地元の商人の船から他地域の商品を交易するので、西海岸以东には精通していないことを論証する（76）。さらに、不案内の論拠は、空想的な島への言及や、「無知に常に伴い無知を特徴づける、驚異への軽信性と愛をもって、この遠隔の地方には人食いや異様で奇怪な姿の人々が住んでいると物語る」ことである（77）。それでも、この案内記の著者をヨーロッパがインド東部以东の知識を負っている最初の古代著述家と評するので（78）、インドの正確な知識の範囲が極めて限られていたことが判る。

取り上げるローマ帝国期の第二の著作家はストラボン（紀元前63-21年）で、彼もインド東部はほとんど知らなかったとされる。内陸の知識はアレクサンダーの将軍の記録からで、それ以上の追加は僅かで不正確とロバートソンは批評する。ガンジス川への直接の航行がなかったことが無知の原因で、ストラボンの識別力や勤勉さは評価しているので、彼自身が訪問し実見していれば、事実の確実な記述に行きついたと考えている（78-79）。第三の著作家、大プリニウス（23/24-79年）もインドの知識が地域的に限定されていたことは同様で、重要な追加の新情報は遠洋航路とタブロバナ（Taprobana）島（スリランカ）の記述にとどまる（80）。

第四にプトレマイオス（100-170年頃）がより詳しく検証され、ロバートソンの「科学」「哲学者」の概念と史料批判の関連を考えるうえでも、より着目に値する。先行するインド地誌より高く評価されるのは、彼がヒッパルコス天文学から緯度経度の枠組みを世界地理に適応し、緯度経度の測定で地理学の正確さを向上させた功績からで、正確にどの場所も確定する一般的方法を天文学の普遍理

東インド会社論争とロバートソン『インド史論』—哲学的歴史と古事文献学— 角田 俊男
論から導出したことが地理学の科学的基礎と評価され、「哲学者」と呼ばれている (80-81, 94)。しかし、緯度経度が正確に決定された場所はインドでは限られていた。ローマ帝国内は帝国による旅程や測量が参照可能で、帝国外では旅行者の日記を利用したのだが、インドの情報は不正確で、それを信用したプトレマイオスはインド亜大陸の全体像を南北でなく東西に伸びた形に誤解した¹⁶。インド地理の部分的な知識では正確な場所もあったが、東海岸から東南アジアでは緯度経度のずれが多くあった (82-84)。したがって、科学的な普遍的原理や計測方法の演繹も、個々の場所の位置関係については、現場でしか獲得できない地方的なデータが不確かであれば、事実の確証を保証しないということである。

さらにロバートソンは各地の緯度経度の測定方法を問題にする。彼はプトレマイオス以前の時代からは地図は現在まで伝わったものはなく、緯度経度や距離を測定しない限り、異なる場所の相互の位置関係は想像できないと推論し、経度緯度のもつ地理学上の重要性を強調する。しかし、太陽や月の天文測定による場合も近代よりも劣った機器の性能や不注意な観測で実際の数値の正確さは損なわれた。特に緯度以上に経度の正確な測定は困難であった。さらに、海上での測定の場合に、非天測位置推測法 (reckoning) では、入り組んだ海岸線の陸地に沿って蛇行する船の進行した距離・方向を不正確に計測することになり、その信用度は低くなる。ロバートソンはこのように科学的な実測手法の不確かさを指摘する。同時に前述の事情を再説する。つまり、インドの東海岸以東の地域は、アジアの地元貿易商の領域で、エジプトからの交易商は西海岸まで到達し、そこで前者からの交易品を積み込むので、インドの東方諸国に実際に航行することはなく、プトレマイオスの計算の根拠となる情報の源泉は、「進取の精神や獲得愛から、通常の航海の限界を超えて進もうとする数名の冒険家の報告」という信用度の低いものだった (99-107)。

遠隔で頻繁な交流もないインドの東方では成り立たないが、位置の測定の精度を上げる方法あるいは状況をロバートソンが指摘することに着目しよう。

¹⁶ 注 35, 381 によれば、「マラバル海岸とコロマンデル海岸は、南に伸び、コモリン岬で鋭い角度で交わる代わりに、プトレマイオスによって、西から東へ、少し南に傾いたほとんど同じ直線の形に、広げられた」。

活発な交易の結果、どの国の港も頻繁に訪問されると、異なる航海者の非天測位置推測法がある程度相互に修正し合うようになり、地理学者が真理により接近して結論を形成することを可能にしたかもしれない。(103)

この複数の異なるデータの偏りを相互に修正する方法は、科学的な緯度経度に接近する有効な方法であろう。

経度緯度の数値は場所の位置関係の状況を想像する手段である。さらに、そのより鮮明なイメージは地図によって示されるだろう。ロバートソンによれば、

地図を描く技術は、探検された限りでの全地球の形を示すか、あるいは特定の国々の形を示す技術で、古代人に知られ、想像力 *imagination* を助ける地図の利用がないと、どちらの明晰な観念 *a distinct idea* も形成することは不可能だった。(99)

ここで「想像力」は時空間で遠隔な異邦の場所の状況・関係を事実 zu 正確に想像する能力であって¹⁷、ロマン主義的な超現実の驚異を虚構する能力ではないことを理解すべきである。後者は無知や軽信性と結びつけられ、吟味して批判されるべき対象であった。これと区別した遠隔の多様な個別的事実を具体的に識別する想像力が、直接の遠隔貿易による見聞の情報から可能となり、世界史の批判的な論証方法で重要な役割を果たすことになる。

3. イスラーム帝国とヴェネチア

アラブ人のインド交易史への登場は、啓蒙の文明史の枠組を適応した説明と言えるだろう。ロバートソンはアラブ人が遊牧民に農業と商業も追加したとして、複数の発展段階（「改善の異なる段階 *different stages of improvement*」188）を適宜、歴史研究対象の現実の状態に合わせ組み合わせる方式で、この民族のダイナミックな覚醒を説明する。遊牧民の性格も存続することで、征服の野心という「野蛮」が説明されるのである。同時に、マホメットの新宗教を「熱狂」という

¹⁷ 『両インド史』「序文」で「ヨーロッパの貿易がギリシア人のそれとは比べものにならないほど遙か遠くにまで広がっていること、航海術が進歩して以来、われわれの想像力がもっと大きな、もっと変化に富んだ対象に向けられるようになっている」(I26/12頁)と述べている広い想像力はこの種の例だろう。

啓蒙の宗教批判の言葉で解釈し、世界への布教の熱意を説明する。しかし、ここでの強調点は、以上の諸側面を総合する広範な通商活動にあり、これは上記の変化が帰結したそれまでの「民族の独立と個人の自由」から他地域との社交への転換であった。エジプトやペルシアの征服支配も、カリフ帝国のインド交易を支配する中心主題の手段と解釈されている（115-117）。

イスラーム圏が、インド交易やインドの知識で、ギリシアやローマを凌駕したという評価でロバートソンは一貫している。前節でみたようなローマ帝国のインドとの交易や知識の東の限界を超えて、羅針盤は使用されていなかったが（ロバートソンは羅針盤をヨーロッパ起源としている）、イスラーム教国からの交易船はインドから東南アジアと中国までアジアの広範な海域に進出した。インド国内の制度、学芸、習俗についての知識もギリシア・ローマより深まり、インド天文学の進歩はイスラーム圏に知られていた。イスラーム教国からインドへの来訪者は、アラブ商人だけでなく、ペルシアからのネストリウス派キリスト教徒も含まれ、布教団が派遣され教会も建設された（117-123）。

インドへのキリスト教の布教について、利害関係者である東西のキリスト教徒の著者の一致する証拠を「二人のイスラーム教徒旅行者」¹⁸の証言で確認した見解は、9世紀と10世紀にインドや中国のキリスト教徒（多くはペルシアのネストリウス派教会由来）の数は相当多く、布教の成功を示す（123）。しかし、ロバートソンは注40でこの証拠をさらに批判的に検証する。ここでその方法に論及する。彼はインドや中国でのキリスト教やイスラーム教の進展には確かに疑いえない明証性を認めてから、両宗教とも「改宗者の数」と明確化すれば、「特にインドで、極めて少ない」ということが現代には知られていると批評する。つまり、多数存在するとされるこれらの宗徒は、主に外国人の商人・移民やその子孫ということである。こうした史料の批判的な選択は、先住民の改宗が抑制される原因となる関係をヒンドゥー社会の固有の仕組みに求める方法が支えている。所属す

¹⁸ 851年に書かれたアラビア語写本からルノード（Renaudot）による仏訳（1718年）やロバートソンが参照したその英訳が出た「二人のイスラーム教徒アラブ人旅行者によるインドと中国についての古代の見聞談」（118及びその注37, 382-383）。

るカーストの特殊な特権はそこから出てしまえば喪失する「排他的で伝達不可能な権利 an exclusive and incommunicable right」である。ヒンドゥー住民にとってアイデンティティそのものとロバートソンが内在的に深く理解したカーストの権利を失う改宗は極度に受け入れ困難であることが、説明されていると言えよう。ロバートソンの説明において、改宗が受容可能なのは例外的に最下層カーストかパリアのみとなる。牛肉や酒のようなヨーロッパの食文化を改宗者は模倣するが、それは改宗者をパリアに沈めることになる。これが改宗の大きな障害とロバートソンはみている。逆に、この問題に気づいたカトリックの宣教師にはバラモンの習俗を取り入れ、パリアとは接触しないとした者もいたが、これは「キリストの宗教の精神と教えに反する」と教皇の遣外使節から非難された(387-389)。スコットランド教会にはむしろインドへの積極的な改宗の伝道やイギリス化を求める教会人も多く¹⁹、彼らにはロバートソンの抑制は失望を招いたであろう。しかし、現地民の文化的な権利喪失を伴う改宗に懐疑的なロバートソンの異民族の文化社会への共感的理解は着目すべきである。それが例示する彼の過去の史書や史料の検討方法は、東西の通商交流史をヨーロッパ中心主義でない方向に、インド側の習俗・制度から精神構造の歴史までも含めようとする多軸的な史書への試みに開いていると考えられるだろう。

イスラームの興隆の時代、ヨーロッパのインド交易はどうだったか。ロバートソンは関連史料の欠乏の苦情を繰り返す。その場合には彼の史論は「推測 conjecture」²⁰の方法に拠らざるを得ない。その結果、歴史叙述の明細な事実の展開は不可能で、いくつかの主張を史料から論証するにとどまる。つまり、ここはマクロな哲学的歴史になるということである。具体的にロバートソンの議論の内容をみていく。第一に、史料の不足や偏りへの批判がある。史料の蒐集が整備されてきた彼の啓蒙の同時代でも「商業の事業」には注意が不十分であり、ましてやこの史論の扱う時代は歴史学が提供する情報が最も乏しい時代の一つと理解

¹⁹ Carnall, op.cit., pp.217-218.

²⁰ 「同時代の史家の不完全な情報から、私たちが敢えて推測する限りで」(126)。

していた。ギリシア帝国とイタリア諸都市の歴史家から通商史の史料が期待されるが、ビザンツ史はマホメットの時代から4世紀半以上は、「最も貧弱な年代記に含まれ、その編集者は視線をめったに宮廷の陰謀、劇場の党争、神学論争を超えた先に広げることにはなかった」。さらに劣っていたのが、イタリアの個々の国家と都市の「修道院めいた年代記編者 the monkish annalists」だった。ここには、ロバートソンのスコットランド穏健派教会の洗練された社交的な宗教によって世俗社会と調和する志向性が反映していると読めるが、事実を編集記録する古事学・文献学が展開した修道院の来世の関心とは、商業文明を志向する彼の啓蒙の哲学的歴史は衝突することが明らかである。

第二に、西欧諸国の都市の「国内産業活動の技術 the arts of domestic industry」の熟練→富の増加→インド奢侈品への需要の復活という一連の経済的連関が提示される(127)。この経済的進歩の流れは啓蒙の哲学的歴史の主軸であるが、その推測は種々の事実的な事情に根付いている点で、経済状況も包含する多様な古事学・文献学史料の蒐集と選択の伝統ともつながっている。「商業精神のこの再生を示すいくつもの事情は、勤勉なムラトリー Muratori によって蒐集された」(127)と、ムラトリー(1672-1750年)の史料批判に依拠している。

第三には、西欧のインド貿易への参画、拡大を阻害するイスラーム側の独占と宗教的敵対が指摘される。これは啓蒙の批判的な哲学的宗教史の適応である。新たなイスラーム勢力に支配されたアレクサンドリアやシリアから閉ざされたヨーロッパはインドとの通商から排除された(124)。インドとの直接の交易でなく、イスラーム商人、そして、コンスタンティノープルの商人が二重に中継ぎする交易は、西欧の商人、消費者にとって不利であったことは明らかであるが、その際に、この通商関係をさらに悪化させたのが相互の宗教上の偏見敵意だった。啓蒙の宗教批判の言説が、相互の不信と敵対を意味する、「詐欺師の弟子」と「偶像崇拜者」いう相手への非難の呼称に使われ²¹、西欧のインド交易がイスラーム勢

²¹ ロバートソンは「キリスト教信仰を告白するあらゆる民族が、東でも西でも、天使と聖人の崇拝を至高存在の崇拝と混ぜ、彼らの教会を絵画と像で飾った」(429)と、イスラーム側からの批判を受け止めている。

力の介在により妨げられたであろうことが論証される。ここで着目すべきは、こうした啓蒙の推測的歴史に加えて、ロバートソンが物的史料から交易の途絶を論証していることで、この点で古事学的な学識が受容されていると言える。すなわち、商業都市の初期の文献史料の不毛さを指摘する箇所（129）につけた注41で、ヴェネチアがアレクサンドリアと定期的な通商を締結した年の年代記に関連する通商の情報がないことを述べてから、むしろエジプトとの通商がしばらくは途絶していたことを示す「事情」の発現として、ロバートソンは次のモノの変化に言及する。7、8世紀以前はイタリアやヨーロッパの証書は大部分エジプトのパピルス紙に書かれていたが、この時期以降はほとんどの憲章、証書は羊皮紙に書かれた。これはムラトリー（Murat, *Antiq. Ital. Medii Aevi*, vol. iii, p.832）による古事学の成果の援用である。交易の途絶に関する古事学的な「詳細 particulars」を展開した理由は、ロバートソンによれば、近代史家の次の思い込みによる事実誤認を正すためであった。つまり、何人もの近代史家は、エジプトやシリアの港へのヨーロッパ商船の従前通りの自由な往来により、カリフによるこの地域の征服後すぐにインド交易は、古来の回路に復帰したと考えたのである（389-390）。

第四に、史実の論証を古事学の史料から行った注を付けた本文に続いて、当初の交易の途絶後の次の時代に関して、ロバートソンは商業に関する啓蒙の経済学や文明史の一般的言説に戻り、この時代の経済史料の欠如から、次のような因果関連を概説する。宗教上の敵対の影響を超えて、「東洋の奢侈品への趣味」が、マルセイユなど南仏都市を、アマルフィやヴェネチアでの法外な高値よりは低価格ですむように、コンスタンティノーブルとの通商だけでなく、さらにはエジプトやシリアとの通商にまで参加させた。ここで、ロバートソンはこの通商の規模や様態を正確に追跡するには情報が不足していると断り、通商の通常の効果として「敵対する原理と不調和な習俗の人々を相互に和解させる」と商業の社交性の一般論で代替し、「規則的な通商が徐々にキリスト教徒とイスラーム教徒の間に確立されていたかもしれない。それは対等な条件によるもので、ヨーロッパの諸国民は東洋のすべての奢侈品を以前と同じ経路で受け取っていたかもしれない」と推測する（130-131）。しかし、啓蒙思想の哲学的歴史の説明する商業の社交性

がこの歴史の結末ではなく、この後、十字軍による通商の阻害や偏向が来るので、追ってきた歴史プロセスは大きな宗教戦争を準備する前史であったということになる。

なお、第五に、コンスタンティノーブルはインドや中国からの商品の集散地であり続け、その豊かな富は東ローマ「帝国の衰退 the decline of the empire」を遅らせたと評価するのだが (126)、成長したイスラーム勢力の中でのこの帝国首都の通商上の地位の維持がいかになされたか、西欧都市との初期の関係はどのようであったか、については、具体的に詳細な叙述はないので、十字軍以前の時代の三者をつなげる国際関係の全体像が十分には結ばれないように思われる。これも史料不足からの限界なのであろう。

十字軍の時代に移る。この時代もロバートソンは軍事政治史として扱うのではない。宗教による通商の圧倒ではなくて、巡礼も十字軍も通商の利益が貫徹していたという経済史の視点から書き換えて概観していくのが特徴である (133)。ヨーロッパの君主・諸侯にとって、十字軍は商業先進地の文化に触れる経験であった (136)。提携したイタリア諸都市は通商が第一目的で、征服地に移住し、通商の自由や関税の免除など多くの特権を享受した (137)。コンスタンティノーブルの征服と復活もヴェネチアとジェノバの通商競争が実態で、ヴェネチアは絹産業と黒海経由のインド交易路をギリシア帝国から奪取し、帝国の再建後は、アレクサンドリアのインド交易ルートに転換し、エジプトのスルタンと通商条約を結んだ。この意義をロバートソンは「古来の偏見と敵意は忘却され、彼らの相互の利害が初めて公平で開かれた交易をキリスト教徒とイスラーム教徒の間に確立した」 (146) と解釈している。ロバートソンの提示する歴史の全体像として、十字軍への国際連携以降、14世紀には「いくつもの状況が連動し、この普遍的な交流の加速化に向かった several circumstances had co-operated towards accelerating this general intercourse」のであり、通商活動の広範な拡大はハンザ同盟、ブリュージュ、南ヨーロッパを結ぶ通商圏の形成をもたらし、この大通商圏はインド商品の消費市場と位置づけられている (152-153)。1453年のコンスタンティノーブル陥落は、前述のヴェネチアのインド交易の既定路線からすれば、大きな変更

を迫る事件でもなかっただろう（その後の世界史的な二つの「発見」につながるヴェネチアの世界交易独占を生む点では大きな因果連鎖を構成するが）。マムルーク朝のスルタンと提携したヴェネチアによる通商の利益独占と繁栄は、ロバートソンの説明から、インドの物産を蓄えるエジプトに木材や金属の産出がなかったところに、ハンザ同盟都市からの物資やヴェネチア自身の工芸品、あるいは南ドイツの銀を供給するという各地の経済的な相互のニーズの状況に適っていた事情があり、同時に政治的に他のヨーロッパ諸国は他の事業にとらわれていた事情も重なるので（159-161）、構造的に決定されていたことが判る。

ヴェネチアの独占は他地域の利益繁栄と両立しないと想定されているわけではないことに注意したい。豊富なインドの高価な交易品のもたらす絶大な利益は、ヴェネチア一都市を超えて、ブリュージュやアントワープ、アウクスブルクなど、それが通商関係を持つ他の諸都市にも有り余る利益を均霑していくように、通商だけでなく、各都市の市民の衣装、住居等、生活面でも豊かさが広がっていく様子が描写されている（163）。彼の同時代の東インド会社が交易の富から他国を排除する独占的競争と批判されていたことからすれば、この解釈のもつ実践的含意を推測できよう。

ロバートソンの方法で注目すべきは、事実や解釈の決定の正確性について現在利用可能な史料の限界から留保して、最終確定と独断しない点である。彼は別の関連性のある史料の探究に向かう。さらに、これが懐疑主義に帰結することなく、歴史判断の正確さを担保するのが様々な状況への着目である。この方法は、豊かさが各都市に均霑していく前段落の解釈についての、次の引用から読み取れるだろう。「利用できるよりもより一層詳細な情報がなければ、これを正確に評価することは不可能ではあるが、しかし、多様な状況 various circumstances を提出し、この結論の正しさを、一般的に、確立させることができるかもしれない」（164）。

ヴェネチアのインド交易独占は、それによる権勢を彼らが最も確信していた15世紀末に「二つの出来事」で粉砕される。「アメリカの発見」と「喜望峰経由の東インドへの直接航路の開拓」である（166）。新航路はポルトガルがインドとインド洋を支配する近代の世界（通商帝国 a commercial empire）を開くとロバー

トソンは解釈し、ポルトガルがヴェネチアとイスラーム（マムルーク朝とその後のオスマン帝国）の抵抗を武力で退ける史実でこの世界の変化を例証する（166,177-181,183）²²。

4. 近代のインド交易—古代やアメリカとの比較

最後の第4節で、ロバートソンは「真正の情報」を種々の史料から論証する論究の基盤の上に、「一般的な観察」を提示する。これは近代のインドとの通商を古代の通商やアメリカとの通商と比較することで、個別の出来事が全体の歴史の中でもつ意味の説明や、出来事の結果の追跡に資するという目的があり、これを「教育的で有用な instructive and useful」と言うのは（191）、現在の問題をより深く検討できるようになるからだろう。

最初の二つの論点は、古代と近代の事情の識別による時代錯誤批判である。第一はなぜ古代にインドへの直通の航路の発見が試みられなかったか、という問題について、ロバートソンは、古代には交易国が東地中海に位置していた関係からアフリカを回る航路は不要であり、かつ当時の航海技術から不可能であったと応答する（191-195）。第二はなぜ古代には海路から植民や征服をしなかったかという問いで、これも技術的制約で応答する（196-197）。これらは現代の観点からの誤った問題の立て方であると批判していることが重要であろう。「遠い過去の諸民族の行為に関して判断するとき、最もひどい間違いは、彼らの時代の考えや見方でなく、私たち自身の考えや見方によってそれを決定するときだ」（192）と述べることから、ロバートソンの史料批判の方法について敷衍することが許されよう。前述のようにその後の時代の科学的な知見を基準としてより正確な事実の詳細を論証する手法があったが、緯度経度の測定のように、場所や位置関係をヨーロッパの科学的な枠組みの中に移して客観的に把握することを目指すのとは別に、ここでの引用からは、古代人や異邦人の認識に近代科学的な座標軸に包摂して決定されない特殊な事情を認める方法が示唆されている。比較は他者の観点へ

²² 他方で、ロバートソンは、これ以降も陸路による交易がアジア北部やアフリカで展開することに論及し、バランスを取る（183-189）。

想像力によって入ることで歴史研究のレベルを高めることができよう²³。

次に近代のインド交易の結果を検証する第三から第五までの論点がある。第三に、ポルトガルの直接交易の結果をインド産品の価格の低減に求め、独占を正当化する「唯一の公平な権原 the only equitable title」として、商品の豊富な供給と手ごろな価格と説明する(199,202)。これは当初のインド交易の公益に適う効果を打ち消す独占への批判と読むべきなのかもしれない。第四は、廉価での豊富なインド商品の供給の結果、奢侈品から一般的な日常品に変化し需要が増加することを、ローマ帝国に侵入した蛮族が洗練され奢侈への欲求をもつようになる変化と合わせて、歴史の進歩を追跡する(202-203)。第五はポルトガルが1世紀間、独占を享受し、他国が競争に入れなかった偶然的な事情を説明する。この独占もオランダとイングランドの参入による競争を招き失われるまで触れている(206-209)。独占の実現は偶然に依存する不確かなもの

²³ ジェームズ・ミルの『英領インド史』の序文の方法論と比較するのが有益かもしれない。ミルの方法の基礎は、文明と未開の発展段階の比較を枠組みに、人間本性原理からの「推測の歴史」で、もう一つの基礎であるベンサム功利主義の受容以前から、長老派の環境の影響からか、ヒンドゥー文明を「野蛮」と否定的に評価していた(安川隆司「ヒンドゥーと『丘の部族』—J.S.ミルのインド論に関する一考察』『東京経大会誌』、2022年、第313号、248-250頁)。ロバートソンとミルには意義深い異同がある。事実について真理か、有益か、有意義かどうかの論証を歴史の重要な中心課題とする点で、両者は一致し、ミルは「批判的な歴史 A Critical History」を提唱し、ギボンを次のように引用している。「先行者の意見を集め、考量し、選択することは批判的な史家の権利で義務である。研究で精励を発揮するほど、知識の蓄積に改善を加えることをより合理的に期待できるようになり、その利用は皆に開かれている。」(Gibbon's Miscel. Works, iv.589)。他方で、ロバートソンがヒンドゥー賢者との接触とサンスクリット古典の英訳開始を奨励歓迎していた時代(つまり一次史料の蒐集の時代)からの変化とみられるが、ミルは、必要な史料は文書で既に整っているという認識から、インドの経験やインドの言語の知識は必ずしも必須ではないとして、ロバートソンが実見したことのないアメリカの歴史を書き、ドイツやスペインを訪問せずに、ドイツ語の知識もないままで、カール5世史を書いた例を挙げている。しかしながら、証拠の検証に役立つ習慣はインドよりもヨーロッパで獲得されるとして、ミルが観察や語学の習得と区別して、「結合、識別、分類、判断、比較、考量、推測、帰納、要するに哲学する諸能力」を重視し、イングランドの書齋でインドでの長期的見聞からよりも多くの知識を得られると主張するところで、ロバートソンは全面的に合意したであろうか。ミルが「人間本性の法」「人間社会の原理」の知識を史家の肝要な資格とする点は啓蒙の哲学的歴史の継受であるが、それが近代西欧の偏狭な視角になることを反省し自他の距離を意識するロバートソンの広い想像力については触れられていないようである。ミルはウィリアム・ベンティンク(William Bentinck)の証言を引用し、インドに滞在していてもブリテン人は「余所者 strangers」であるという現地民との疎遠さを印象づけている(xvi,xviii,xxi-xxiii,xxvii, xxx)。ロバートソンであれば、これをイングランドでの研究の優位を説く理由にするのではなく、社交による自由な感情の交流を開くことで相互理解の進展を求めたのではないだろうか。

東インド会社論争とロバートソン『インド史論』—哲学的歴史と古事文献学— 角田 俊男
であることが論証される。以上の三つの歴史の因果関係に関する論点は、インド交易の独占の問題を、低廉で豊富な商品供給や他国との競争との関連で、検討する議論を用意するので、同時代の東インド会社をめぐる論争に有意義だっただろう。

続いて、最後の三つの論点は、「アメリカの発見」と「インド航路の開拓」は同時的であったが、それぞれがどのような異なる結果や展開をその後もたらしたか、を比較し論じる。第六はこの二つの事件が世界各地を通商で連結させた結果を例証し、自給したインド産業によるヨーロッパからの金銀の流出が問題視されてきたが、ヨーロッパにはアメリカ銀が補充となり、さらにアフリカからの奴隷をアメリカに供給するように（「忌まわしい交易 odious traffic」）、世界的な経済循環があり、アジア、アメリカ、アフリカを相互依存の通商関係に結びつけたヨーロッパは莫大な利益と権力を獲得したと俯瞰する（209-213）。同時代のインドとの関係では、金銀流出からブリテンによるインドでの徴税を必要とする議論を反駁し、東インド会社を交易に専念させることに問題はないという議論につながるだろう。第七の議論はインドとアメリカの対比で、前者は文明・技術の進んだ産業の繁栄している地域で、ヨーロッパにとり有益な通商に適合し、植民地は不要だったが、アメリカは未開地域で、鉱山資源以外は不毛だったため、ヨーロッパからの植民が必要となり、農園の商業作物とヨーロッパの工業製品を交換する貿易が成り立った（214-219）。インドへの流出が批判されたイングランドの金銀は、アメリカから需要のある工業製品の輸出によって獲得した財貨で、この世界貿易の全体過程でイングランドの勤労は増進した（220）。このように反論するロバートソンにとって、富は勤労にあるのだった。インドとの通商を「単純な商売のやり取り a simple mercantile transaction」（217）とする表現には、イギリス東インド会社の政治や軍事、財政への関与を反省する含意があるのだろう。

最後の第八の議論は、ポルトガルによる新航路からインド地域の征服支配までの革命的变化の政治的な結果についてで、ロバートソンは、インド貿易を奪取し独占していれば効果的に強大化したと予測されるオスマン・トルコの専制への隷属からヨーロッパの自由を救済したと評価する（221,225）。この主張ではレーナルの『両インド史』の権威を援用している。この論点の含意は、トルコの専制に対して西欧とインドの交易の自由を対比させて、ムガル帝国に代わるブリテン

帝国を正当化するようにも見えるが、さらに、もしこのトルコのようなアジア的専制の言説でブリテンの東インド会社がその暴政を正当化するならば、ブリテンはインドを独占支配する世界帝国となり、インドや他のヨーロッパ諸国の自由を奪い隷属させることになるという懸念を提起したものと読めるかもしれない。

第2章 インドの制度と習俗

「付録」でロバートソンはインドの国制、法と司法、技芸、科学、宗教を概観する。これは本論の通商史との関連で、なぜインドの製品は古来から世界の需要を引きつけてきたかという観点に限定した考察である(228-229)。第一に、この問いは、学問的であるとともに、同時代のベンガル総督への弾劾という政治的文脈で、インドへの暴政の正当化を許さない古来のインド文明の擁護という趣旨を帯びていることが示されるだろう。第二に、この「付録」という形式で収められたインド文明論は共時的な地域社会の文化の詳細な分析を特徴とするが、それがどのように新古典主義的な歴史叙述や啓蒙の哲学的歴史と関連するか、史学史的に検討しよう。

1. カースト制度

ロバートソンは基本的にカースト制度を超歴史的に永続する社会機能として評価する。インドを大陸ヨーロッパの啓蒙専制主義のカメラリズムの国家に使われた「よく統制された社会 a well-ordered society」「よく規制された国家 a well-regulated state」とする理解から、ロバートソンは、個人の天才の自由な発展を活動原理とするブリテン型の社会と対比して、インドでは「共同体の全員の生計、安全、幸福」に配慮する生活行政的な立法を認めることで、カースト制度の必須の機能を評価する。国民生活に有用な財の提供を確保する目的から、職業の世襲的な分業による専門化、技術の伝達と改善という機能をみるのである(233-234, 注58, 412)。分業の進展は社会の進歩に関する啓蒙の推測的な文明史からの発想であるが、それを最初期に置く形で取り込み、その後は進歩でなく古来からの永続的な状態を想定する点で、啓蒙の文明史観を修正している。ここで検討すべきは、歴史家の他者への理解の問題である。

この体系「カースト制度」は、私たちが、非常に異なる社会状態に置かれた

ことで、形成した考えには極めて不快なものであるが、注意深く視察すると、不注意な観察者が初見時に想像しがちであるよりも、狙った目的を達成するのに適合していると判明するだろう。(234)

このようにロバートソンは述べ、異文化社会に対して、社会を全体として見通し、その各部分の関係から相互の機能まで想像するという方法が例示されている。さらに、カースト制度からインドの諸制度や習俗の不変性も説明される。ロバートソンはイスラームやヨーロッパの征服の暴力も社会の基底にあるカースト制度を改造できないと断言する(235)²⁴。カーストはさらに次項でみる国制の社会的な基盤という機能も持たされる。

2. 国制

次に、ロバートソンは、インドの古来の国制からインドが古代の初期から極めて高度の文明に到達していたことを論証する。史料として、インド側の古代の年代記は²⁵、人の寿命を数千年で計算するような神話伝承的な色彩が濃くして除外する点で、ロバートソンは古事学には選択的に応答していると言える。代わりに、アレクサンダーによる征服時のギリシア人の記録から、複数の広大な王国の存在が立証されるので、自然状態から進歩した文明政治状態が推定される(237)。ロバートソンのいう文明は国家の確立された政治状態でなければならず、法の支配、専制権力を抑制する国制の概念が中心にあることは、正しく把握する必要がある。王権を抑

²⁴ ここでのカースト制度の探究は制度的な歴史的な変化の相で見ることが捨象している。それがアーリア人の征服に由来する歴史はまだまだ知られていなかったようで、太古からの永久の制度とみなす。他方で、ブリテンとの違いから個人の自由を阻害する問題を批判している点で、相対主義的にカースト制度を是認するわけではない。また、イスラームやブリテンからのインドの習俗や慣習への影響の事例にも気づいてはいる(注59, 416-417)。カースト制度の社会機能の内在的説明はブリテンの偏狭な自由主義を基礎とする社会改革の専制的な方法を反省させる。インド文明の古来の不変性によってその先進性を強調する論調から、西欧化を専制的手法で強行するような帝国支配論はロバートソンには問題外であったらう。

²⁵ 注67はこの四つの時代の概説である(434-437)。「旧約聖書の権威に基づいた時間の計算の真の様式」と調和させるような探求の深化を期待しているので、ロバートソン自身はキリスト教の普遍史の枠組みに依拠していたようである。ただし、キリスト教の摂理は徐々に社会の進歩とともに、迷信からの啓蒙によって、部分的に明らかになってきたと考えて、キリスト教神学と世俗社会の文明史を折り合わせた(Nicholas Phillipson, "Providence and Progress: An Introduction to the Historical Thought of William Robertson," in S.J. Brown, ed., op.cit., pp.68-69)。

制するのは、議会でなくて、一つはバラモンの神聖性と、もう一つは地方統治を委任されたクシャトリアが世襲権力になり「中間身分 an intermediate order」を構成することによる(238-241)。制限を受ける王権は、農民の生産活動を保護し支える。国制により自由を追求する古典の歴史叙述から民生の関心に重点が移っている。

世界に輸出されたインド製品の原材料を供給してきた重要な農業生産に関連して、農民の土地保有権が国制の重要な部分として論述される。土地に関する王と農民の関係について様々な説があったが、ロバートソンは土地を所有する王から借用する農民(Ryots)は小作人であり、その借地権は永続的で、地代は古来の調査と査定で確定していたと理解した。外国からの侵略以前の古来の国制では農民の借地権は衡平で、その生産活動も確実だったというのが彼の一般的な史観である(242-243)。さらに、注61で次の三つの説を詳説する。1)王から土地を配分されたのは、「村落つまり小共同体 villages or small communities」で、それが共同の農作業をする。2)王から土地を受けとったザミンダール(Zemindars)が世襲の所有者で、土地を農民に配分し土地税を集める。3)ザミンダールは一時的な徴税人に過ぎず、農民は土地を王から直接配分される。最後の3)がグラント(Grant)の意見で、ロバートソンはこの論争にブリテンのインド財政の将来がかかっていると評価している(419-420)。ロバートソン自身は判断する十分な史料がないと保留するが、封建的土地保有との比較が有益ではないかと提言して、土地財産は、王の意向次第で取り戻される状態から始まり、次に一生涯の保持に、そして永続的な世襲財産に変化していったという見方を提起している(421)。彼にとって重要なのは、インドの生産活動の繁栄した文明につながる庶民の権利であって、この点を保証する古来の国制の存続を彼は強調する。直接耕作者である多数庶民の生活の保障に最もつながるのは、上記の三説のうち、農民に歴史的な土地所有権を認める第一と最後の説だろうが、個人の私的所有権による地主貴族のブリテン社会との類推からか、ロバートソンは現在のザミンダールを世襲地主とする現状に適応した歴史理解を取ったようである。同時代の1793年にコーンウォリス(Cornwallis)総督によりベンガルのザミンダールら地主に永代の地稅査定が確定され、ザミンダールが近代地主として産業発展を主導することが期待されたが²⁶、

彼らから委託された徴税請負人の介在のもと農民の過重な負担の歴史が続くことを想起すれば、東インド会社の暴政を正当化させない意図のもと、ロバートソンの古来の国制論は現実を美化した表象にみえる。彼は各身分に配慮する政治として、ヨーロッパ古代人もインドに「最も幸福な種族」をみて、近代人も「インド政体の平衡、人道性、穏健」を称賛しているのは、不思議ではないとまとめている (244)。

3. 法律と司法

文明の進歩の測定において注意すべきは、国制に次いで、「法律の精神と司法の手順を規定する形式の性質」であると、ロバートソンは言明している。これはブリテンの国制主義に軸を置いた文明観として重要である。彼はインドの文明を支える法律と司法については、古代人の報告史料は限られ、正確で広範な近代人の調査資料は利用できるが、「より高次で純粋な出典」としてヒンドゥー法典の英訳を参照する (248-249)。彼の哲学的歴史は信頼性の高い試金石として最新のサンスクリット文献学と提携するのである。寛容なアクバル大帝のもとで彼の重臣アブル・ファズル (Abul Fazel, 1551-1602) によって書かれた政策や慣習など百科全書的な書物『アーイーネ・アクバリ *Ayeen Akbery*』からのヒンドゥー法典の概要と²⁷、これを模倣し超えたと評価するヘイスティングズ総督の後援のもとでのホルヘッド (Nathaniel Halhed) による『ヒンドゥー法典, *A Code of Gentoo Laws*』である²⁸。ヒンドゥー法学を最古と称揚する理由は、それがサン

²⁶ Ranajit Guha, *A Rule of Property for Bengal: An Essay on the Idea of Permanent Settlement*, Durham and London: Duke University Press, 1996, pp.182-183.

²⁷ アクバルとファズルのヒンドゥー教徒への寛容政策をロバートソンは高く評価し、その基礎に「彼らの習俗への公平で誠実な調査」によって彼らの徳と学芸の達成を理解したことをみた (333-334)。

²⁸ ロバートソンにとって、サンスクリット古典の研究支援においてヘイスティングズを名指して評価することと、古代から文明化されていた先進的なインド人の評判を高めることで腐敗と濫用を指弾された会社のインド統治を批判しその改善を説くことは、両立していた。彼は南部カルナティックのパラモンが認めたベナレスの天文学の完成から、同地を支配しているブリテンの「啓蒙された時代と国民」における使命として、「インドにおけるブリテン帝国」が行政と別に「科学や文芸の調査」を奨励するように説いている (298-300)。18世紀全般のヒンドゥー文化への共感とヘイスティングズのその保護育成へのパトロネージについては、J.L.Brockington, "Warren Hastings and Orientalism," in Geoffrey Carnall and Colin Nicholson eds., *The Impeachments of Warren Hastings: Papers from a Bicentenary Commemoration*, Edinburgh University Press, 1989, pp.91-108.

スクリット語で書かれているからであり、さらに、法が書かれた時代にインドが高度の文明に達していた「内在的な証拠」が指摘されている。すなわち、社会の進歩とともに、訴訟や法律は増加し複雑化する傾向があるが、ヒンドゥー法典は、ローマの十二表法よりもユスティニアヌス法典に比較できるように、精密で洗練された司法制度の発展に見合った内容を備えているのである。ここでは哲学的歴史と文献学が補強し合うのであって、判決の基礎が「正義の偉大な不変の原理」にあると評価されている。ロバートソンはこの古代の法典に「啓蒙された商業国民の法学 the jurisprudence of an enlightened and commercial people」を確証する (250-253)。そこで、彼はウィリアム・ジョーンズを「東洋文学がそのあらゆる枝において大きく恩恵を受けている人物」と賛美し、古代インド法典における法定金利と海上保険の危険 (adventures) におけるその例外への言及を引用している (253-254)。

4. 技芸

技芸による古代インドの文明化の証明では、最初に公共建築物として、洞窟から寺院へ進化していったパゴダから始め、次に要塞の実例が取り上げられる。現地調査でなく挿絵入りの出版物を通してであるが、建築物や付随した彫像等についてその規模や構造の改善からインド古代文明の進歩を実証する古事学の手法が発揮されているが、モノを扱う古事学は、インドの彫刻がエジプトとペルシアの彫刻よりも優れ、ギリシアの「優美な作品」よりは劣ると位置づけるように (259)、蒐集・調査・分類する帝国主義の方法につらなる問題性も示している。さらに、主たる交易品だった綿などの繊維製品がその卓越した刺繍や染色技術において論及される。しかし、特に重要なのは言語の芸術で、サンスクリット語文学から近年に英訳された作品、ウィルキンズ (Charles Wilkins) による『マハーバーラタ *Mahabarat*』の『バガバッド・ギーター *Baghvat Geeta*』とジョーンズによる『シャクンタラー *Sacotala*』が高度の文明の洗練を確証する例証として抜粋される (270-278)。異文化の芸術に対する批評の方法についてロバートソンは次にように注意している。

そのメリットを評価するにあたって、しかしながら、私たちはその作者には

全く未知の国民の文学や趣味から引き出された批評の原理をそれに適用してはいけぬ。私たちはギリシア劇の統一を期待してはいけぬ。私たち自身の適宜性の規準で計ってはいけぬ。地方の慣習、特異な習俗を許容しなければならぬのであって、それらは国内の社会状態、政体の秩序、宗教の意見の体系から生じてくるが、ヨーロッパで確立されたものとは非常に異なっているのだ。(274)²⁹

この文化的差異への想像力と同時に、ロバートソンの啓蒙の文明史論では、むしろ人類共通の趣味の洗練への調和的な世界が核にあり、理解し合えないで衝突する悲観的な特異性への認識は弱いのではないだろうかと思われる。『シャクンタラー』を読む彼の想像力は、「洗練された習俗と繊細な感情の人々 a people of polished manners and delicate sentiments」の間でこそこの劇は創作され鑑賞されると(278)、東西の読者を調和的に結びつける共通の地平を思い描く。

5. 科学

古代に高度に発達していたインド文明の証明として、その科学の先進性は重要である。その史料としては、古代人ギリシア・ローマ人による記録は不完全で、近代の接触が真正な情報を豊富にもたらしたが、バラモンやその言語の閉鎖性を克服した近年になってより決定的な証拠に到達した(280-281)。ギリシア哲学優位の通説を見直すインドの熟達した論理学、倫理学の概観に次いで、ロバートソンは、自然科学(physics)、数学・力学・天文学の古代インドでの発達を詳説し、インド人の日食と月食の予測を、「天文学の幼年期にある未開な民族」による周期の観測に基づく方法よりも高次の方法に進み、食の様々な情況分析や天体運動の正確な知識に依拠していたと区別した(293)。インドでは「天文学の計算の非常に合理的で精巧な体系」(注68, 440)が発達していたのである。

²⁹ これは文化相対主義で批評を封じ込める意図ではない。ロバートソンは『バガバッド・ギーター』を「美しく悲哀に満ちた」と評価しつつ、その主人公が戦闘目の前の両軍の間で哲学の講義を延々と受け続ける構成の不備を指摘する。『シャクンタラー』の牧歌的な純朴さと優しさを称賛し、最後の神の介入を悪い効果で技量不足を露呈すると批判しつつ、主人公は天空の妖精から降りてきて、聖なる隠者に育てられたことからそれほど不自然ではなく、「東洋の趣味に極めて調和する」と理解している(272-273, 274-275)。

6. 宗教

ロバートソンの説明は啓蒙の宗教批判を構成する迷信の言説による。インド全域にわたってその宗教制度は「迷信の規則的で完全な体系 a regular and complete system of superstition」であり、神々に献納された壮麗な寺院、「日常生活の歳時」と混同した礼拝の儀式、全てを主催するバラモンの神聖な権威と莫大な収益がみられる(301)。しかし、多神教の実態(聖職者の計略 the craft of priests や民衆の軽信性 the credulity of the people)を詳細に描写するのではなく、ここでの彼の意図はインドの文明状態の解明という目的に限定される。同時に、「地上のあらゆる地域における迷信と偽りの宗教の歴史と進行の見取り図と概略」ともなるだろうという点は(302-303)、異民族の歴史叙述が依拠する一般的な変化の枠組みを示唆するものとして興味深く、追究する。

迷信と「真の宗教」「理性的な宗教」との対比がロバートソンの宗教史の基本である。後者は科学に涵養された理性から生じ、啓蒙された時代に完成される。抽象概念とそれを表現する言語の発展をまって、人は因果関係を追究できるようになり、「世界の創造者であり統治者」としての唯一神の認識に到達するのである。迷信や神話は「未開の野蛮な時代に社会の幼年期に形成される」。それは「無知と恐怖」から生まれ、災厄への慰めを求める。自然の通常の進行からの逸脱への驚愕からその原因を求めて、多神教が生成する(303-305)。こうした説明は、理神論や啓蒙思想の宗教論で普通にみられ、特に独創性はないが、ここで「知性」と「想像力」が対比されていて、想像力が見慣れない未知の事象に向かう能力として位置づけられていることは³⁰、想像力が異民族社会の民衆の精神史に入って、その慣習と習俗を理解する能力となりうることを示唆する。

迷信の構造は、どの未開社会でも類似しており、自然の運行全体を統括するような一つの精神には至らず、個々の自然現象ごとに一つの神を想像することで、神の数を増やしていく。ロバートソンが「地球のあらゆる部分で確立された迷信

³⁰ 「彼らの知性はこれら〔原因〕を発見できないことが多いが、想像力は精神のより前向きで熱心な能力で、躊躇なく決定する。それは自然における異常な発現を不可視の存在の影響に帰している」(305)。

の体系における特徴の際立った斉一性」を強調するのは、インドの特異性からの植民地支配論を論駁する意図があるからだろう。どの未開社会でも共通して、精神の進歩により自然や社会についての知識が拡大し、知るようになったそれぞれの事象を司る神々は多数となる。これが顕著に生じたのがヨーロッパではギリシア、アジアではインドで、両国民を「最も早期に文明化された」と括る(307)。さらに、社会の状態を探究する歴史学の史料に神話になることにもロバートソンは着目している。人々はその時代にその社会で価値を認めていた性格を神に帰するので、「どの偽りの神でも、その冒険と属性を知ること、私たちは、ある程度の確実性をもって、彼がその尊厳に高められたときに、社会と習俗の状態 the state of society and manners はどのようであったに違いないか、言明できる」(308-309)。ギリシアと同様に、インドの神々はそれが創出された当時の社会は未開な無秩序の状態であったことを立証する。インドの無秩序の歴史は専制支配を正当化する論拠となるが、ここでロバートソンの宗教史は終わらず、さらなる文明の進歩とそれに応じた迷信からの変化が続く。

世界の迷信に類似性をみるロバートソンの観点は儀式においても貫徹し、世界各地の迷信の儀式は獰猛な神への苦行や犠牲と放縦な神への快樂の祝祭の二類型に整理される。ギリシア・ローマとインドの間で二種の儀式は同様で、インドの穏和な国民性がヨーロッパに知られる以前は、他国の残虐な儀式と変わりなく、放縦な儀式では他国にない淫らな放縦さが公然と示されたと批判する(310-312)。

迷信の類似性の論点から離れて、ロバートソンは異なる宗教の間の理解の問題に論及する。「私たち自身のものとは広く異なる宗教の意見と慣行に関する私たちの推論で、私たちは誤る傾向が極めて強い」(313)。真の理性的な宗教を教え込まれてきた場合には、迷信の信条や儀式が信じて受容されていることを疑う。これは伝承的な虚偽の歴史への全面的な不信・懐疑にも当てはまるだろう。私たちにとって合理的な事実に見える知識のみが他の社会の人々によって受容されたわけではないのである。ロバートソンの方法論で、偏狭な「推論」の誤りを正すのは「経験」である。「公共宗教 the public religion」は「古代のヨーロッパの人々」

つまり、古典古代のギリシア・ローマ人異教徒によって事実信奉され、懐疑論や風刺は信者からの反発を招いた。ロバートソンによれば、インドでの伝統宗教への愛着はさらに強かった。民衆は宗教の理性的な探究から遠ざけられ、懐疑や不信心の誘惑から遮断されていた。これはバラモンによって知識へのアクセスが制限されていたという状況によるもので(313-315)、決して啓蒙主義者で開明的なスコットランド教会人のロバートソンにとって望ましい方法ではなかったが、啓蒙主義の観点から迷信に対する民衆の信心の事実を否定するのは、誤った歴史の論証であったということだろう。

こうした根強く確立された迷信は、啓蒙によって急激に打破されることはない³¹。ロバートソンは啓蒙、「科学と哲学」の浸透と「自由で十全な検討」は徐々にしか進行しないと、「偽りの宗教の歴史」の次の段階を読む。啓蒙の結果、迷信から唯一神による自然の創造と摂理を認識する真の宗教へと改善されていく過程である。この変化については「両国の教会国制 the ecclesiastical constitution の大きな相違」から、ギリシアと比べ、バラモンという祭官・僧職の特権集団が支配するインドの迷信の体制は批判的検討に開かれていなかったと想像しがちであるが、高名なバラモンは科学の発展に献身し、正しい自然の認識から「至上の存在」の信仰に到達した(315-319)³²。このようにロバートソンは、宗教論においても、東西の対等な啓蒙の進行過程を想定する。その証拠は、アブル・ファズルやヨーロッパ人の報告とともに、それだけではインドの真の宗教が近

³¹ ロバートソンは穏健な啓蒙が求める実践上の慎慮をバラモンに投影する。インドの近代化、改革で課題になるが、知識人と民衆の乖離の問題である。唯一神の宗教からは、バゴダでの儀式は「軽薄や不道徳な儀式を迷信的に増加させた偶像崇拜にみえたに違いなく」、神の是認は「心の高潔さと習俗の純粋さ」によってのみ得られるという考えを、『マハーバーラタ』の教えとしている(323)。

³² ここで、デイドロによるとされるインドの古代宗教を扱った対応部分の『両インド史』との比較が有意味であるかもしれない。デイドロは宗教批判を一貫させ、迷信のみならず、バラモンの哲学にも抽象的思弁・論争・怠惰に対する社交性からの啓蒙の宗教批判を向ける。ギリシアとの関係づけも、バラモンは不合理な形而上学の要素を古代ギリシアのプラトンら哲学者に伝え、それがスコラ神学に至って、ヨーロッパを害していると徹底している。他方で、バラモンの秘密主義が解かれる日も遠くはなく、古代の経典・法典が究明されるのを待つという留保もつけている(Raynal, op.cit., I60-62/レーナル、前掲書、57-60頁)。

東インド会社論争とロバートソン『インド史論』—哲学的歴史と古事文献学— 角田 俊男
年の洗練と誤解されてしまうので、古代の賢者からの継承であることを論証するために、英訳されたサンスクリットの古典に遡る³³。ロバートソンのインド史観では、アクバルのような寛容の例外を除き、イスラーム征服者の熱狂で抑圧された近代のヒンドゥー教は古代よりも、権勢も科学探究も、衰退したとみている(321)。

インド古代のバラモンに崇高な真の宗教を論証することで、ロバートソンは「私が讚えたギリシア哲学者のそれと等しい称賛に値する至高の存在の記述」(322)と述べるように、インドの公平な評価を求めている。民衆の迷信を超える科学的知識の進歩は困難で多くの歳月を要するもので、ギリシアではソクラテスとその弟子の時代まで待たねばならなかった。さらに多くの時間がローマではかかった。これに比べて、インドでは遥かに早期に到達されていた(324-325)。ロバートソンがこのように主張する証拠が『マハーバーラタ』であった³⁴。

ロバートソンは慎重にキリスト教との比較には立ち入らないで、古代ギリシアの異教や哲学との対等な比較にとどめているが、キリスト教の神学からすれば誤りと批判を受ける点の指摘はしている。それは神が被造物の世界に拡散して個に活力を付与し、知性も神から流出して輪廻転生で浄化された後に神に再結合するという汎神論の教義である(325-326)。しかし、これをストアの神学論との類似と結論づけており、インドをヨーロッパと差別化しないという全体の論旨から外れることはない。

最後の論点は、「より危険な傾向をもつ実践的な過ち」で、哲学者が真の宗教を民衆に伝達し迷信から解放しようとする民衆の反抗を受ける恐れから、民衆を迷信に欺瞞されたままにし、公益と秩序に適合した行為に誘導することである。「確立された意見に熱心に固執し、その虚偽を暴き出す試みに反抗する」という表現から(327)、1790年代フランス革命期の急進主義と保守主義の対立の激化

³³ 「バガバッド・ギーター」は「神性の統一性の教理を確立すること」が主目的だったとして、その神の記述を引用している(321-322)。

³⁴ 「それは非常に太古の作品で、その著者は神学・道徳・形而上学の原理への知悉を示し、当時歴史が知られていたどの国民によって到達されていたように思われるよりも、正しく合理的な原理であった」(325)

をコンテクストとして読むべきであるように考えられる³⁵。ロバートソンはギリシア・ローマの古典からこのダブルスタンダードを正当化する言説を引用するとともに、インドのパラモンが民衆には知識を広げようとしぬい考えが同様であることを示す(318-331)。インドが特異な文明化されていない状態にあるということではなく、ヨーロッパの古典で通常広く普及していた考えと実践と共通であったという解釈であり、ロバートソンのインド観を「オリエンタリズム」と分類するとしても、それは全面的な是認ではなく、問題点の公平な批判を含むものだった。民衆の迷信に介入することへの反発を恐れた現状維持の政策をオリエンタリストは主張したが、ロバートソンは、徐々にであれ、民衆の啓蒙を基本的に信奉していた。

結論—啓蒙の帝国を批判する古事文献学

ロバートソンは啓蒙の文明社会史の共通枠組みに古代インドを包摂する通商史の通史を提示することに成功した。通商史から、定期的な交流の及んだ地域に、実見による正確な知識の範囲を限定する方法で、曖昧な驚異を好む伝聞や軽信性と識別し、古代インド史の事実を確証する。帝国支配拡大の教科書ともなりかねない政治軍事史に偏向した古典古代の歴史叙述に代替するとともに、通商史は歴史的事実の確実な知識の範囲についての批判的検証の方法でもあった。その事実の中心にはインド商品への世界からの需要があり、それは古代インドの勤労・技術・学問やその社会基盤となる国制や法制度の進歩の論証によって傍証され、インドの古代文明のヨーロッパに対する歴史的な先進性を説得する言説を支えている。古代(ギリシア・ローマ)人のインドについての知識の正確さを実際の交流接触の頻繁な地域に限定する史料批判の主張は、自身の旅行の見聞に基づくヘロ

³⁵ フランス革命に対するロバートソンの姿勢は、1789年当初は歓迎していた。ウィッグ主義から1688年の名誉革命に隣国が追いつく改革の動きを評価する1788年の説教からも革命支持は推測される。そしてパークの批判は受け入れなかったようである。その後1793年の危機から悲観的になり、王党派勢力に追い詰められて過激化暴力化した革命から離れていった(Anna Plassart, *The Scottish Enlightenment and the French Revolution*, Cambridge University Press, 2015, pp.49,59,63,81,84)。

ドトスの方法の適用とも言え、それは驚異怪異の伝聞への軽信性だけでなく、啓蒙の近代西欧からのインドに対する偏狭な野蛮視への軽信性も見直す意図があったと言えよう。さらに、古代インドについての知識では、ロバートソンの時代に進歩したブリテンのサンスクリット語文献学の成果によって、ヒンドゥー教の起源の教義を正確に批評することができたと確信していた。ロバートソンにとって、儀式に現出する迷信は、宗教からは識別され、その当時の社会の状態を反映する社会史文化史の史料として読むべきものとされた。想像力が「明確な観念」を結ぶことが歴史的事実の確証の規準で、文明の進歩は、古代に移されて、異邦の諸事実を公平に判断する普遍的な観点となっていた。啓蒙の哲学的歴史は社会の進歩の基本的な図式をインド史の古代に提供し、他方で、個々の事実の論証は古事文献学の史料批判を通してなされ、古代における進歩の到達と連続性の証拠となった。

ブリテンのインド論についての通説は、インド文明に共感的なオリエンタリストと西洋化を求めるアングリシストに二分する解釈枠組みが支配的であるが、パーターソンはこのように単純には還元化されない複雑な理解と批判の混合を指摘した³⁶。ロバートソンのインド史観も両義的で、ヒンドゥー教に唯一神の真の宗教と多神教で偶像崇拜の迷信を識別していた。後者の負の側面への軽蔑に由来するブリテン帝国の圧政を批判することが、中心課題であったが、同時に、批判した迷信からの解放・啓蒙をバラモンに促進するためであれば、ブリテン帝国による寛容な異民族統治も許容したであろう。アクバル大帝の政策を模範としていることからこのように推測できるだろう。アクバル大帝の善政の強調からは、パークラの弾劾者のように、インドの過去に、イスラーム征服王朝の時代も含め、アジア的専制を否定し、古来の国制の継続を主張する立場に近いが、他方で、基本的に『インド史論』はイスラーム勢力を熱狂と専制と解釈してきたのをみてきた。同書で扱うインドの制度と習俗は専らヒンドゥー教徒のものであり、それはブリテンのインド関係者の関心の変化と呼応する。つまり、インド史の実践的な関心

³⁶ Patterson, op.cit., pp.54-55.

は18世紀末にはムガル帝国の古来の国制から古代のヒンドゥー文明に移り、ブリテン帝国は商業や産業の進歩に具現化される文明と啓蒙を推進する役目をもったのである³⁷。ロバートソンは宗教儀式が示す民衆の迷信的な習俗に全面的に共感し、それへの介入を否定するという姿勢ではなかつただろう。法の支配と通商や文化での交流が中心の関係を構想していたと想像される。全体の基礎にある啓蒙の文明史の観点からは、文化の差異を超えた共通性を強調することになり、そこから帰結する政治はナショナリズムの分立ではなく、構成地域の異民族の民生を対等に考慮し、啓蒙と通商の進歩を行き渡らせる帝国統治が結論となるだろう。しかし、西欧中心主義の偏狭な啓蒙を推進する帝国に対する鋭い批判をサンズクリットの文献学・古事学からインド古代文明の優位性を公平に評価する視点が提供したであろうことは確かである。インドの人々への文化的承認から彼らへの尊敬と幸福に貢献する『インド史論』の終極的な目標は、インド史の公平に批判的で正確な論証の自由を必要として、当然それは帝国支配の権威を乗り越えるものであつただろう。ヒンドゥー古代文明論はそれを保護するブリテン帝国に取り込まれてしまう面があつたとしても、注の示す史料の批判的検討の方法は帝国からの自由の実践につながるだろう。

³⁷ Robert Travers, *Ideology and Empire in Eighteenth-Century India: The British in Bengal*, Cambridge University Press, 2008, pp.244-249. トラヴァースはヒンドゥー古典文明→ムガル帝国の野蠻と熱狂→ブリテン植民地下の近代の啓蒙という新たな史観が示すイデオロギー調整の代表者として、ジョーンズとウィルキンズを挙げている。